＜総括＞

出題数	現代文　１題・古文　１題	試験時間	75 分

「公共性」という主題について、「共同体」や「市場」や「国家」などと対比しながら包括的に考察した評論文からの出題。
本文では、国語現代文の入学試験としてはやや抽象的かつ専門的な議論が展開されているため、受験生は読解に苦労したと思われるが、むしろそれ以上に、本文の内容を複雑煩瑣に絡み合わせた、関西大学方式とも言える選択肢の細部の検討・吟味に労力を割き、そのうえ多くの時間を要したと想定される。文章内容の理解を二の次として本文と選択肢の部分的な記述の照合（パズルの組み合わせ）に徹した受験生が得点上は有利になりかねないという実状には懸念を表明するとともに、懸命に本文全体の主旨の理解に努めた受験生の皆さんの姿勢には敬意を表しておきたい。大学入学後に求められる力こそは、そのような読解力である。
漢字問題については、相変わらず難度が高いと言える。
本文には、意味段落毎の区切りや小見出しは無かった。

＜本文分析＞

大問番号	一
出　典 （作者・ジャンル）	『公共性』（齋藤純一・評論）
頻出度合 ・的中等	
分　量 前年比較	**分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）**　約 4700 字　約 4 頁 1/3 （前年約 4700 字　約 5 頁強）
難　易 前年比較	**難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）**

© 河合塾　2024 年

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）
一	評　論	問１	記述式	標　準	漢字の書き取り問題　「浸透」「拘束」の２問
		問２	マーク式	標　準	本文の部分的な論題について筆者が述べている内容を選択する問題 「『公共性』という言葉」をめぐる記述を、第１・２段落から丁寧に読み取る。
		問３	マーク式	標　準	本文の部分的な論題について筆者が述べている内容を選択する問題 「市民的公共性」をめぐる記述を、第２・３段落から丁寧に読み取る。
		問４	マーク式	やや難	本文の部分的な論題について筆者が述べている内容を選択する問題 「『公共性』をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮」と「共同体主義」との「関わり」について、第４～６段落の内容から丁寧に読み取る。選択肢ｄは、両者の「関わり」が不明瞭である。
		問５	マーク式	標　準	本文の部分的な論題について筆者が述べている内容を選択する問題 「公共性」をめぐる記述を、第７～１２段落から丁寧に読み取る。
		問６	マーク式	やや難	本文の部分的な論題について筆者が述べている内容を選択する問題 「市場」と「公共性」と「共同体」との関係をめぐる記述を、第１１～１４段落から丁寧に読み取る。 全選択肢末尾の「公共性においては」という記述には困惑したかもしれない。〈言葉の交換においては人称性が意味をもつ〉という内容が第１４段落末尾に見出され、さらに「言葉」と「公共性」とを結びつける手がかりが、第１２段落の「公共性は」「言説の空間である」という記述に見出されるとは言え、「言葉の交換」が「公共性」の特質であるという記述が本文中に明示されているとは言いがたい。
		問７	マーク式	やや難	漢字の書き取り問題 「受忍」「余儀」「援用」「献身」「多寡」の５問
		問８	論述式	標　準	本文の主題に関わる内容について筆者が述べている内容を説明する問題（五十字以内） 「国家を国民の共同体の意味に解するかぎり」（第１５段落）という表現をふまえ、「公共性」と「国家（＝共同体）」との違いを、本文全体の主旨もふまえ、複数の配点ポイントを意識しながら、制限字数以内にまとめる。

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2024 年

＜学習対策＞

・現代社会の諸問題や社会の特性について論じた様々な文章に触れておくこと。
・問題演習などを通じて、論旨の展開を的確にたどりながら、全体の主旨を精確に把握できる読解力を養っておくこと。
・漢字問題を除き本文中に「傍線部が無い」とは言え、傍線部に該当する部分や内容が本文中に見出されるので、まずはそれを意識し、さらに設問の意図を丁寧に検討して要求されている内容に関わる部分に忠実に選択肢を分析するという練習を積み重ねておきたい。
・関西大学の現代文では、漢字問題が多く出題され、しかも難度がきわめて高いので、これを確実な得点源とするべく、できる限り早い時期から語彙力の養成に取り組むことが重要である。漢字問題を得意とする受験生は、関西大学の入学試験では圧倒的に有利となることを肝に銘じておこう。

© 河合塾　2024 年

＜総括＞

出題数	現代文　１題・古文　１題	試験時間	75 分

長編物語の一場面を、長文の前書きや比較的多めの注を付して読解させる、本学の定番の出題形式。設問も、傍線を付さずに、設問文や各選択肢に共通する表現を手掛かりにして該当箇所を確定させ、そこに含まれる重要表現などを中心に組み立てられており、こちらも本学の定番の設問形式である。

＜本文分析＞

大問番号	二
出　典 （作者）	『狭衣物語』 （作者不詳）
頻出度合 ・的中等	頻出出典
分　量 前年比較	分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）約 1300 字（前年約 1280 字）
難　易 前年比較	難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

＜大問分析＞

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）
二	作り物語	問１	マーク式	標　準	「死なば」の仮定条件、尊敬表現のない「見扱はん」の主体の確定、「ねたく」の訳出がポイント。
		問２	マーク式	やや難	「なさけだつ」と「心苦しう」の訳出がポイント。「心苦し」の語義に着目してｅを正解と考えるが、逐語訳を問う設問ではないことを考えると内容として破綻のないｂも正解と考え得るか。
		問３	マーク式	標　準	前書を踏まえた「かかる人」の具体化、「平らかに」と「心幼き」の文脈を踏まえた訳出がポイント。
		問４	マーク式	やや易	打消接続の「で」、「あながちに」の訳出、「いかなるありさまにて」の文脈を踏まえた訳出がポイント。
		問５	マーク式	標　準	比喩表現「涙の海」の理解、「つくづくと」の訳出がポイント。
		問６	マーク式	標　準	「たより」の訳出、反実仮想構文、掛詞「其処・底」の理解がポイント。
		問７	マーク式	やや易	「ただ今、かくなりぬ」の文脈を踏まえた理解と、「いみじき」の訳出がポイント。
		問８	マーク式	標　準	「なりにき」の「にき（完了の助動詞＋直接体験過去の助動詞）」の理解と、それを踏まえた主体の確定がポイント。
		問９	記述式	やや難	「つらし」、仮定婉曲の「ん」、類推の「だに」自発の「られ」、強意＋推量の「ぬべし」がポイント。

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2024 年

＜学習対策＞

今回は約 1300 字と標準的な長さだったが、一般的な入試問題の本文としては長文に属するし、本学では時にこれ以上の長文も出題される。本文を丁寧に隅から隅まで読み解いていくというよりは、設問や選択肢を手掛かりにして本文を速読し、選択肢相互の異なる部分を見比べて正解を探る、という解答スタイルになるが、学習の初期からこのような練習をするのは望ましくない。序盤から中盤は、一般的な本文読解の学習を積み、その上で終盤に、本学独自の形式に慣れるように調整するのが望ましい学習手順である。

© 河合塾　2024 年